

## 修 士 論 文 の 和 文 要 旨

研究科・専攻	大学院 情報理工学研究科 総合情報学専攻 博士前期課程		
氏 名	工藤 雅己	学籍番号	1030036
論 文 題 目	教育の質向上のために有効な学生タイプ分類と 同時性・異質性を考慮した双方向コミュニケーションに関する研究		
要 旨	<p>サービスサイエンスの枠組みの中に含まれている教育は、他のサービス分野と同様、同時性や異質性を考慮して分析がなされることが重要である。教師の授業（指導）と学生の学習が同時に行われる中、学生の異質性を考慮した授業を構成することは非常に難しい問題となっている。</p> <p>Tsubaki, Kikuchi and Kobayashi(2008)及び Tsubaki and Kudo(2010)では、教師の授業によって学生の満足度と学習成果の両方を同時に高めることは難しく、満足度向上のためには教員と学生の共同解釈（コミュニケーションによる意思統一）を創出してそれを発展させること、学習成果に関しては学生の学習スタイルを学生自身が改善することで全体の授業効果の向上が期待できるという研究結果が得られている。</p> <p>そこで本研究では、授業の中間時点で学生にアンケートを実施し、学生の授業に対する位置付け、学習スタイルを詳細に分析し、それをもとに実際に教育・学習の改善を行い、教育・学習効果の向上に寄与している要因の詳細な分析を行った。そして教育・学習コミュニケーションによって授業の教育効果が向上する方法の検討を行った。</p> <p>はじめに、学生から主に「授業で身につけたいと思っていること」、「普段と試験前の学習スタイル」、「授業満足度向上のために学生と教師双方がすべきこと」について自由記述回答による文章データを得て、KeyGraph によって学生のタイプ分類及び各タイプの中での学生個人個人の学習に対する異質性を詳細に分析した。具体的には、「学習成果別」、「座席別」、「修得したいレベル別」、「満足度別」に学生をタイプ分類し、タイプの異質性の分析を詳細に行った。</p> <p>次に、分析結果を踏まえて、授業中間時点以降で授業・学習の改善を行い、中間試験の学習成果と期末試験の学習成果の推移から、どのような改善項目が学生の学習成果向上に寄与しているのか分析を行った。その結果、中間試験の類似問題を解き直して提出した学生の学習成果が向上していたこと、中間試験以降の学習活動において「演習問題を解く」というスタイルを加えることのできた学生の学習成果が向上していたことが確認できた。</p> <p>学生のタイプ分類、点数変化を考慮した群分けによる各群への効果的なアプローチ方法を明らかにできた。その際に、どの教育・学習方法どの群に対しては有効で、どの群に対しては有効でないのか、一対多の双方向コミュニケーションにおける効果のトレードオフまでを検証することができた。</p>		